

ふたつの出会い

——西と東、宗教と音楽——

皆川達夫

ご承知の通りに、今日のわが国の音楽界は、いわゆる洋楽——ヨーロッパ系のクラシック音楽、さらにそのクラシック音楽の影響を受けたアメリカ系のポピュラー音楽の双方の含めた洋楽を、もっぱら受容しております、そして私ども日本人、特に若い世代たちは、日本古来の伝統音楽よりもむしろその洋楽に近親感を覚え、洋楽の楽しみにひたりきっております、ここから、もうすでにひとつの問題がはじまっているかと存じます、本来ならばひとつの民族は、その民族がつくった伝統的な音楽に聴きいるというのが当然であり、またその時代の世相を反映したその時代の音楽に触れるというのが自然のことでありますけれども、われわれ日本人は外国の、ヨーロッパあるいはアメリカの一八〜一九世紀の音楽にむしろ近親感を持っている。このへんに、私たち現代の日本人、日本民族というものの文化あるいは生活の在り方の矛盾と申しますか、二面性というものが、はしなくも浮びあがっているわけでございますが、この事からは、今は聞わないにしても、今日の私の話のひとつのライト・モチーフ、主導動機になる問題でござ

います。

そうした、いわゆる洋楽、もう一度申しますとヨーロッパ系のクラシック音楽、そしてその影響を受けたアメリカ系のポピュラー音楽というものが日本に伝来しました時期、いうならば洋楽事始の時期というのは明治開国期以降というのが通説でございます、これは現象として確かにその通りでありまして、明治以降、日本政府の積極的な外国文化導入の気運に乗りましていわゆる洋楽というものが国に入って参りました。学校教育においては一切の日本の伝統音楽を拒否しまして、洋楽の理念に基づいた音楽教育が、小学・中学校でなされてきました。そして学校唱歌というものが作曲され、小学校音楽教育における重要な役割を果たしてきました。ここにもまたひとつの問題点がございします。現在にいたるまで、少なくともここ二十年以前までは、日本の学校教育音楽は洋楽オンリーで進められてきたのであります。日本の民謡とか日本の伝統音楽というものが小学校教育、中学校教育の現場にのせられたことは、少なくともここ二十年の間はありませんでした、そのように、子供のころから洋楽教育が全国的な規模で積極的におすすめられてまいりました。さらに軍隊でございしますね、軍隊の中に洋楽というものを位置づけてまして、軍隊隊というものが洋楽の普及に、少なくともこの戦争までは大きな役割を果たしてきたわけでありまして、さらにもう一つ注目すべきことは、大衆文化とむすびつきまして、たとえば浅草オペラというような言葉で象徴されます通り、大衆音楽も洋楽の普及に大変重要な役割を果たしてきたわけでありまして、そしてそのような基礎の上に今度は本格的なクラシック音楽が、はじめは来日した外国人音楽家たちの演奏会として受容される。さらに音楽取調所というものが設置されることになる。これが現在の東京芸術大学の音楽学部の前身でございます。それにつづく他の音楽大学の卒業生たちが外国に留学し、外国の洋楽のテクニクというものを身につけて帰国する、まあ、それやこれやもろもろの動きがからみあひまして、今日わが国では、場合によってはヨーロッパあるいはアメリカをしのぐほどの洋楽の全盛

を見せております、ひとつだけ例を申しますと、アマチュア運動でございますが、アマチュア合唱というのが世界中でも日本の水準が一番高うございます。それぞれの学校や企業あるいは合唱団体に属するアマチュアたちが、ウィーンであるいはベルリンで合唱祭の金賞を勝ちとつてくるということが、もう珍らしくございません。いわんやプロフェッショナルな人びとの活躍に関しては、皆様ご承知と思いますが、たとえば小沢征爾君であるとか、秋山和慶君とか、若杉弘君といったような人たちが世界の超一流のオーケストラを指揮し、立派な名声を獲得しているわけであります。その点でも日本人というのはまことに不思議な民族でありまして、自分たちの血のなから生み出したわけではないベートーヴェンの音楽あるいはマーラーの音楽を演奏して、世界的な名声を獲得しているということになってくるわけがあります。

このような日本における洋楽の隆盛というのは、明治開国以降はじめられたというのが一般の通説でありました。ところが、歴史書をひもとくまでもなく、それよりもさらに三百年、つまり今より四百年昔に、実はわが国に洋楽が渡来していたわけがございます、それは申しあげるまでもなく、一五四九年のことでありますが、フランシスコ・ザビエルが日本に渡来いたしました、日本にキリスト教の伝道を開始いたしました。このキリスト教の渡来はそのまま並行して、洋楽の渡来を意味していたわけがございます。注目すべきことでございますが、キリスト教という宗教は音楽を大変重要視し、尊重する宗教でございます、もちろん仏教も神道もそれぞれ宗教音楽をもっているわけでありますが、キリスト教は特に音楽を重要視し、礼拝も音楽と共に進行するというのが中世以来の基本的な行き方でございます。皆様ヨーロッパ音楽の作品をご覧になっておそらくお驚きになられるであろう事実のひとつに、どうしてこれまでヨーロッパの作曲家たちは必ずといっていいほど宗教音楽の大作を残しているのだろうか、どうして今日にいたるまで、ヨーロッパ音楽のひとつの重要なジャンルとして宗教音楽があるのか、ミサ曲とかオラトリオとか受

難曲といったものがどうしてこれ程までたくさん生まれてきているのだろうか。バッハ、ヘンデルは言うに及びません。多少反宗教的な言動が目立っていたベートーヴェンにしましても、例えば「ミサ・ソレムニス」とか、あるいは「カンラン山上のキリスト」といったような名作を残しており、それに、最近映画で大変有名になっておりますモーツァルト。その性格、その生き方は必ずしも模範的に宗教的とは言えないあのモーツァルトも、数々の宗教音楽の名曲、例えば、「戴冠ミサ曲」とか、晩年の「レクイエム」というような大作を残している。それに続く作曲家については枚挙にいとまがありません。シューベルトもシューマンもメンデルスゾーンもブラームスもベルリオーズもブルックナーも、みんな宗教音楽の名作を残している。現代に至りましても、ストラヴィンスキー、あるいは社会主義圏に属するペンデレツキーといった音楽家までが宗教音楽の大作をのこしている。どうしてこれほどまでにキリスト教と音楽の結びつきは深いのだろうか。我々には疑問に思われるわけでありませうけれど、これは中世以来キリスト教のひとつの重要な特徴であるわけでありませう。では、なぜキリスト教がそのように音楽を重要視してきたか。この問題は、私のように歴史を専門にする人間にはお答えできない問いでありますけれども、私なりの素人考えを申し上げますと、キリスト教以外の宗教と申しますか、たとえば仏教の場合にいたしましても、ヒンズー教の場合にいたしましても、目に見えない神様あるいは仏様を目に見える姿に、たとえば仏像を彫るとか仏様の絵を描くとか、神さまの絵を描くといったように、目に見える姿にいたしまして、人間は目で「見る」という行為によって神や仏に接する。そのような傾向が強いように思われます。ところが、ご承知の通りにキリスト教、そしてその母胎となったユダヤ教では、神の像や絵姿を描くことは基本的に許されないわけでございます。その場合、人間は何によって神と結びつけられるかと申しますと、言葉（ヴェルブム）によって神は人間に語り、人間はこの神の言葉を耳で「聞く」。つまり、目で「見る」というより、耳で「聞く」という行為がキリスト教では非常に重要な意味をもつ。そうした契機から、

目で「見る」美術よりも、耳で「聞く」芸術の音楽の方が重要視されてきたのではないかと、存じます、事実仏教にいたしましたも、ヒンズー教にいたしましたもすぐれた宗教美術をうみ出してきております。それに対してキリスト教はもろろんすぐれた宗教美術もございますが、それよりも宗教音楽の方がより深い意味あいをもっていた。以上申しのべましたことがひとつの理由づけになるのではないかと、素人なりに考えております。この点は、むしろ宗教学の先生方の御教示を仰ぎたいところでございます。

いずれにいたしましても、中世以降今日まで、キリスト教は音楽と深い結びつきをもつて展開してまいりました。そしてヨーロッパ音楽はキリスト教に育まれて成長してきたわけであります。ヨーロッパ音楽がキリスト教の教会の門から外に一步踏み出したのは実は一八世紀、モーツァルト時代になってからのことでありまして、それまでは、ヨーロッパ音楽とキリスト教の教会は完全に一体化した存在であったわけでありました。そのようなわけで、キリスト教の伝来ということは、即、ヨーロッパ音楽の伝来を意味しました。ところで、ザビエルの布教活動——まことにエネルギッシュで敬意に価する仕事でございましたが——いろいろな試行錯誤の歩きもあつたようであります。難しいキリスト教の教義を説明してもなかなかすぐに理解できるものではない。まず、洗礼を受ける最低の条件として、ラテン語の聖歌が一節歌えれば、それでもうキリスト教にしましょう、というわけで洗礼をしてしまつたなどということもあるようでありました。また神、とかキリストの訳に困つてしまつて、大日様と訳してしまつた。そこで、「大日様を拝みなさい、大日様を拝みなさい」と申しますと、日本人の方は、これに仏教の一派だろうと思つて、青い目のお坊さんがお釈迦様の教えを広めに來たと受けとる。ザビエルはやつとその失敗を気がついて、大日様ではまずいというわけで、ゼス様、イエズ様と言いかえるなどという、いろいろな失敗もあつたようであります。

また、キリスト教の洗礼をうければ、天国に行けると教える。すると日本人は「では、洗礼を受けないで死んでし

まった私の父母や先祖たちは天国にいないのですか」と質問してくる。「さうです」と答えると、「私が洗礼を受けて天国に行けても、祖先や父母たちがそこにいないのなら、洗礼は受けません」と拒否されてしまう。理屈ですね。これは宣教師たちに日本人の祖先崇拜の強さを教えることにもなりました。

まあ、そのような失敗を重ねつつ、キリスト教は次第にこの日本の地に根づくことになってゆきました。

そして、日本人たちは、この外来の宗教はもちろん、外来の音楽に関しても異常と言えるほど積極的に関心を示し、これを受け入れようとしたしました。フランシスコ・ザビエルが到来したのが一五四九年、その三年後の一五五二年には、もうすでに山口の町で、ミサ・カンタータ、つまり歌ミサが行われていたことが、記録されており、さらにそのしばらく後になりますと、聖週間の諸典礼を全て日本人の信徒による二つのコーラスによって、ラテン語で歌ったというような記録があるわけでございます。カトリックの典礼をご承知の方ならおわかりになられると思いますが、聖週間つまり、キリストの受難をいたむ一週間には、実に数多くの行事が行われるわけでございます。特に聖木曜日、聖金曜日、聖土曜日そして復活祭、などには朝から晩までと言っていいと思いますが、いろいろな行事がとり行われ、従って多数のラテン語の聖歌が歌われるわけでございますが、それを日本人の信徒だけによる二つのコーラスによって歌ったということは、おどろくべきことでありまして、いかに日本人がヨーロッパ音楽の吸収に関しても積極的であったかのひとつの証しになります。このような記録は他にもいくつもございます、ある宣教師は、本国にこういう手紙をおくっております。

「われわれの耳には日本の音楽というのはどうにも理解できない、調子外れに聞える。であるならば、同様に日本人の耳にもわれわれの音楽は調子外れの音楽に聞こえるはずなのだが、不思議なことに、日本人は積極的にわれわれのこのヨーロッパ音楽を聞きたがり、それを自分のものにしたがる」

と言っております。この手紙を裏づけするように、他にも日本人が積極的にヨーロッパ音楽に耳をかたむけ、たとえキリスト教徒でなくても音楽の吸収には熱心であったという記録が散見しております。日本人はこの新来のヨーロッパ音楽に異常ともいべき関心を示している。これは私が最初に申しました今日の話のライト・モチーフと強く結びつくと思います。私も日本人は外来の芸術、外来の風俗、外来の文化に異常なまでの好奇心を示し、吸収しようと思ひます。そしてそれを独特の形で消化し、変形し、受容してゆくという民族でございます。それは何も、天正年間にはじまったことではありません。実は天平の昔から、われわれは常に外来の文化、外来の習慣、外来の風俗、外来の文化に積極的に好奇心を示し、それを取り入れようとしてきた。この点は同じアジア人でも中国あるいはインドの方々とは根本的に違います。ご承知の通りに中国の方々やインドの方々是我々のように積極的に外来の文化をすぐに受容しようとはなさいません。それは、いいとか悪いかとかいう善悪の問題ではございません。善悪とは全く別の問題でありまして、そのために日本の近代化があるいはアジア諸国に先んじて可能になったかもしれません。それが、それと同時にわれわれが払った代償、マイナスの面もあまりにも多かつたことも確かでございます。しかし、少なくとも事実として天平の昔、天正の昔から、そして明治以降今日まで、日本人は、常に外来の文化、今日の私のテーマからすれば外来の音楽に積極的に耳をかたむけ、キリスト教に関心のない人々までがヨーロッパ音楽をとり入れようと努力してきたわけでありまして。

さて、こうした積極的なヨーロッパ音楽受容の努力は、その後さらに熱心に押しすすめられてゆきます。とくに、日本の主要地にセミナリオあるいはコレジオといわれる神学校が設置されるにともない、日本の少年たちのキリスト教教育が積極的に進められます。その日本の神学校の時間表が残っておりますが、なんと驚いたことに毎日、声楽あるいは器楽のレッスンが正課として課されております。毎日最低一時間は正課として音楽を勉強しなければなら

い。さらに日曜日にミサが終わった後、時間があれば自主的に洋楽の勉強をするようにということが規定されております。これではいやが応にも少年の音楽の実力は高まっていくわけでございます。ちょうど時の権力者は織田信長でございましたが、彼は鷹狩りの後で好んで安土のセミナリオに立ち寄って、日本人の少年たちの演奏する洋楽に喜んで耳を傾けていたと記録されております。

このように日本の少年たちになりたいして、セミナリオあるいはコレジオは充分な音楽教育をほどこしてまいりました。従って、信長の最晩年にヨーロッパに向けて出発いたしました天正少年使節、あの四人の少年たちはすでに日本でもかなりの音楽教育を受けております。従って、彼らは本国のヨーロッパにたどりつきましても、現地の人を驚かせるほどの演奏の素養を持っておりました、たとえばポルトガルにエボーラという町がございます、この町の大聖堂を訪れた時には、司教の要請に応じて臆せず大聖堂にあるオルガンをみごとに演奏し、並みいる人びとを感心させたという記録がございます。このオルガンは今日も残っております。手鍵盤が二段鍵盤、それにペダルもある堂々たる大オルガンでございます。これをとにかくバリバリとまではいかないにしても、まずまず演奏してみせる。当時のヨーロッパ人たちがびびくりしたのも当然でございます。ジパングという地の果てから来た少年たちが自分たちの音楽を演奏してみせる。日本人というのは何と素晴らしい文化民族なんだろうと、彼らに実感をもって証明したわけでございます、今日のジェット時代でさえアメリカからきた青年が長唄を歌う、あるいはお琴をひく、歌舞伎のまねごとをやってみせる、これだけで新聞ダネになります。その四百年前に、見たことも聞いたこともないジパングから来た少年が、自分たちの音楽を演奏してみせる。これは彼らにとっては革命的なショックでございます、ヨーロッパが日本を認識する最上の手段となったわけでございます。その意味で、天正少年節は文化使節、外交使節としての役割を、言わず語らずに立派に果たしたわけでございます。

さて、彼らは帰国いたします。すでに九年の歳月がたち、彼らはすでに立派な青年になっております。驚いたことに、織田信長は本能寺の変で破れ、豊臣秀吉の時代になっております。さっそく彼らは京都にのぼりまして、聚楽第に秀吉を訪問いたし、帰国報告をいたします。もちろん、彼らの最大の願いは日本におけるキリスト教の布教の許可にございましたが、秀吉はこれには適当に言を左右して積極的な結論を与えません。しかしヨーロッパの文化あるいはヨーロッパの音楽に関しては関心を示し、ひとつあちらの音楽を聞かせよということになる。かねて用意した通りに少年使節たちは、西洋楽器による合奏を披露いたします。それに対して秀吉は三回アンコールを要求したということです。信長、秀吉という日本の代表的な権力者とともに、洋楽に関して強い関心を示したのであります。

さらに一七世紀にはいり、一六〇五年（慶長十年）には、この日本の長崎で印刷機を使ってキリスト教のラテン語聖歌の印刷をしています。「マヌアレ・アド・サクラメンタ」、わが国では「サカラメンタ提要」と訳されている本が、印刷・出版されております。この印刷に使いました印刷機械は天正少年使節がヨーロッパからおみやけとして持ってきたものでございまして、この印刷機を使ってキリスト教のいろいろな教理書、あるいはイソップ物語とか、平家物語の抄訳とか、ポルトガル語と日本語の対訳辞典とか、重要なキリシタン版というものを印刷しているわけでございます。そのキリシタン版のひとつとして、「マヌアレ・アド・サクラメンタ」、「サカラメンタ提要」という本を印刷しております。そしてこの本の中に二色刷りでラテン語聖歌が十九曲も、印刷されているのでございます。

譜線を赤インクで印刷しております。五線でございませぬ、それから聖歌の言葉の最初の頭文字も赤インクで印刷されている。それに対して、黒インクでラテン語の歌詞、それから何か旗のような音符がございませぬ、これが十六世紀時代の音符の形でございまして、ふつうのいわゆるオタマジャクンとはちがう「ネウマ」という音符で書かれております。今から二曲、この「サカラメンタ提要」に収められましたラテン語聖歌を私が現代譜に解読いたしましたし

て、そして演奏しましたテープを聞いていただきとう存じます。最初の曲が「ヴェニ・クレアトル・スピリトゥス」(聖霊来たりたまえ)という、カトリック教会で大変有名な、聖霊をたたえた賛歌でございます。

(演奏)

今お聞きいただきましたのが「サカラメンタ提要」に記されました十九曲のうち一曲、「ヴェニ・クレアトル・スピリトゥス」でございます。当時さかんに歌われたもので、今日もカトリック教会で歌いつがれているものであります。ところが次にお聞きいただく曲、名前は「タントウム・エルゴ」(かくも大いなる秘蹟)という曲でございますが、これはいへん異色の作品でございます。「タントウム・エルゴ」という曲は、今日もカトリック教会でさかんに歌われております、有名なキリストの聖体をたたえた聖体賛歌でございますが、この歌詞の聖歌のメロディーはいくつかございます。ところが、これからお聞きいただくメロディーは今日のカトリック教会では歌われていない、大変特殊なものなのです。まず音楽をお聞き下さい。

(演奏)

「サカラメンタ提要」に収められました「タントウム・エルゴ」というキリストの聖体をたたえた聖歌であります。この「タントウム・エルゴ」ということばをもつ他のメロディーの聖歌はございます。それは今日も歌われております。ところが、今聞いて頂いたメロディーはありません。このメロディーはいへん特殊なものでございまして、まず、リズムが変わっております、三拍子です。踊りのような、ワルツのような三拍子で歌われている。そして、はっきりりと長調、ドレミファソラシドの音階によっております、ふつう中世のキリスト教、カトリック教会の聖歌は、長調、短調は非常にめずらしく、いわゆる教会旋法によります。これは音楽の専門の話になるのでくわしくは申しませんけれども、教会旋法という特殊な音階によっております。ところが、今のメロディーは、はっきりとした長

調、よっているのです。このメロディーは今日のカトリックのふつうの聖歌集には見られないものです。私はこれを捜して捜して、捜しぬきました。もちろん日本で捜しても見つかりません。これからお話いたします通りにあの大弾圧によりまして、日本では当時のキリスト教の聖歌の楽譜などというものは残っておりません。日本で捜すことはできない。仕方がないので、ポルトガル、スペイン、イタリアなどの図書館をシラミつぶしに捜しました。ところがおもしろいことに、イタリアの図書館に所蔵されている資料、つまり当時十六世紀にイタリアで出版された聖歌集の楽譜では、「タントゥム・エルゴ」は今日ある形のスタンダードな形でしか残っていません。たとえば、ローマのヴァチカン図書館とかミラノのアンブロシアーナ図書館など、どのイタリアの図書館で調べましても、イタリアの十六世紀の楽譜は今日のスタンダードなメロディーしか残していない。そこで今度はスペイン・ポルトガルを調べました。まあ研究の手の内というか、苦労話というのはあまりお話しすべきことはありません。それは私の無力なことを告白しているようなものでございますが、このメロディーを実は七年も捜しました。七年目ようやくスペインの図書館が所蔵していた十六世紀のスペインの地中海域だけで歌われていた聖歌集に、このメロディーがあったのであります。このメロディーは、今日スペインでも歌われておりません。その当時に、スペイン・ポルトガルで歌われていた。それらの国ぐから来た宣教師たちが、自分たちの生まれ故郷で歌われていた、おそらく子供のころから歌い慣れていた「タントゥム・エルゴ」のメロディーを日本に持って来て、一六〇五年に長崎で出版させているわけですね。その点でこのメロディーは大へん注目すべきものでございまして、日本音楽史、あるいは音楽交流史の上に貴重な問題を投げかけている音楽であります。これに関してあまり詳しくお話する時間がございませんのが、残念です。

さて、以上のように上げ潮にあった日本のキリスト教の布教、そしてそれにともなったヨーロッパ音楽の受容は、ご承知の通りに一六一三年の徳川幕府による禁教令の前に、全ては瓦壊いたしました。キリスト教の信仰は禁ぜら

れ、それに伴って、ヨーロッパ音楽というものも邪教の具として、全ての楽譜も全ての楽器も破棄されてしまったわけでございます。従って今日の私たちは、わが国の天正期におけるヨーロッパ音楽の隆盛をただ記録で知るだけでありまして、具体的な資料としては、ひとつとして持つことができない状態にあります。それでは今お聞かせしました「サカラメント提要」はどうして残ったのか。日本で印刷したものを本国に何部か送ったから、生きのこることが出来たのでございます。その本国におくった分が、例えばローマのヴァチカン図書館とか、あるいはロンドンのブリテッシュ・ライブラリー（大英図書館）などに残っている。さらに、当時、中国は日本司教管区でありました、従って日本で印刷したものを、中国へ送りだしました。そこで北京の図書館などで残っていたというように、外国に運び出されたからはじめて、命をまっとうすることができたわけであります。楽譜がそのようでありますので、いわんや楽器、そして上げ潮にあったこの洋楽伝来の風潮は全て無となり、そして二百五、六十年の後の明治期になってヨーロッパ音楽が再導入され、今日のがわが国のヨーロッパ音楽、洋楽の普及の黄金時代にいたった、とこういう次第でございます。全ては消滅し、全ては破壊されてしまった。長いあいだ人びとは、そのように信じてまいりました。

ところが実は、ひとつ細くて、そして強い糸が思いもかけないところに形をかえて残っていたのでございます。それは九州の生月島のかくれキリシタンの祈り、オラシヨでございます。

平戸という島はご承知と思いますが、その平戸島の沖合に生月島がございます。この島はかくれキリシタンの島でございます。今日、約一万の方が住んでおられますが、そのうちの二―三千世帯はかくれキリシタンであろうと言われております。この方々は幕府の厳しい弾圧の下に仏教徒になったことを宣言いたしますが、心の中ではキリスト教の信仰を持ちつづけてきました、毎年一度ずつ奉行所に呼び出されて踏絵を踏む時は、足をきれいに洗ってそっと踏めや、と教えあつて、とにかく一応踏絵を踏んで家に帰ると、縄でつくったムチ（おペンテンシャ、告白、後悔と

呼ばれる)で自分の体を打って、神様のお許しを求めて敵しい弾圧時代を生きぬいてきた人々、これがかくれキリシタンでございます、ところが、七代あるいはそれ以上にわたるかくれキリシタンの信仰は、次第次第に仏教あるいは神道、さらに土俗宗教の影響を受けまして、キリスト教の教義とは異った独特の宗教形態を持つにいたりまして、今日かくれキリシタンの方々のお宅に伺いますと、まず正面に天照大神の祭壇が必要以上に大きく置いてございます。彼らは忠実な氏子で、お祭りになれば一生懸命にみこしをかつぐ神教徒であります、それからお座敷に伺うと、これまた必要以上に大きな仏壇がありまして、ご先祖のご位牌が、ちゃんと並んでございます。ところが、納戸神と申しまして、人目につかない納戸の長持の奥などに、マリヤのメダルだとか、キリストの像だとかいうものが隠してあります、これを拝んでいるわけでありまして、ただしこのキリスト教もいつの間にか混淆宗教になってしまいましたので、理解したい宗教行事がいくつかございます。お祈りを始めますと、その横には仏教徒が忌むところのお刺身とかお酒を並べておきます。何でそんなことをするかと言えば、幕府の役人がふみ込んだ時に、「只今宴会中です」と言う、そのために宗教行事にお刺身とか、お酒を並べておく。もっと注目すべきことはお葬式でございます、亡くなった方がありますと、まずお寺からお坊さんをお呼びいたしましたして、ありがたいお経を唱えていただくわけですが、その間に男がだんだん減りまして、人目につかない座敷に集まりまして、今やってる仏教のお葬式は間違いだから、「取消し」というお祈りを始めるのです。そしてそのお坊さんがお帰りになると、出ていってもう一度、キリスト教式のお葬式をする。「モドス」というのですが、要するに「戻す」わけです。この習慣を今でもやっておられる。はじめは幕府の目をごまかすカモフラージュの手段が、今やひとつのかくれキリシタンの本質的な宗教儀式として変容してしまっているわけでございます。またマリヤは幼な子のキリストを抱いて星空で、三日月の上に立っている姿が普通でございますが、何度も描きなおしているうちに、どうも三日月の上に女の人が赤ちゃんを抱いて立って

いるとは結得できない。ここは島でございますから、三日月がいつの間にか、小舟になってしまひまして、雲が波になり、健康そうな漁村のおかみさんが、大きな胸を出して、チョンマゲ姿の男の子に乳を飲ませているというように、マリヤやキリスト像をいつの間にか身近な人物に変形してしまふ。

そうした、生月島のかくれキリンタンの方々が約一時間かかって唱えられる祈りがございます、これがオラシヨというものでございまして、この語がラテン語の「祈り、オラツィオ」から出ていることは予想がつくわけでございます。今からその一時間かかるお祈りの一番前のお祈りを聞いていただきます。

(演 奏)

いま小声でボソボソ言っておりますのは、オラシヨを始める前に神様を呼び出すところです。神様は大勢おられます、コウシロウ様ですとか、パライソ様、天国まで神様になってしまふわけですが、パライソ様ですとか、黒瀬の辻のバブロー様ですとか、殉教者たちの名前です、さらに竜宮の姫様まで神様になって呼び出されることもあるわけです。これから始まるお祈りをちょっとお聞き下さい。

(演 奏)

約一時間かかる祈りのその最初の部分をお聞きいただきましたが、いかがでございましたでしょうか、おわかりになるところもあれば、全くわからない所もございますね、これは実はラテン語のなまったものでございます、「ですばいてろひひりよえとすべりとさんと三つのびりそうな一つのすすたんしよの……」デウスとは神、パイテというのはロパートル、父でございますね、フィリヨはフィリオ、息子。エトはエット、そして、スペリトサントは聖霊でございますね。三つのビースーナ、ベルソーナ、位相。ひとつのスタタンシヨとは、実体でございますね。つまり「三つの位相を持ちながら、一つの実体であるところの神なる父と子と聖霊の名において」というキリス

ト教の三位一体の教養を、なまっただラテン語で語っているわけでございます、ところが、この方々は、これがラテン語であるとは夢にも思っておられません。「唐言葉デスタイ」、中国語であると言っておられるのですね。「ラテン語でございます」というと、目を丸くしておられるわけです。全く意味はわかっておられません、しかし、先祖から教わったものである、これを唱えれば、諸悪は退散し、豊年になり、大漁になると信じておられるわけでありませぬ。これを習う場合には、悲しみの季節と申しまして、キリストの受難を悲しむ四旬節の時だけです。そして、昔は外に見張りを立てて、教える者と教えられる者とが真夜中にふとんをかぶって教えたと言われております。もちろんこれを紙に書くことはできません。紙に書けばそれだけで証拠になりますから、全部口伝でございます。その全くわけのわからない祈りを延々一時間、オラシヨとして唱えられるわけでありませぬ、しかしこれも当然変形がございます、あて字をなさいませぬ。例えば、バプティスマ、洗礼でございますね。これでは覚えられない。ところが、バプティ島という島の名前にすれば覚えられるわけで、いつの間にか洗礼が島の名前になってしまう。あるいは、マリヤは丸屋さんという。八百屋さんか、魚屋さんみたいにつこうなお店があると思えば覚えられるわけです。このようにして、キリスト教の信仰はどんどん違ったものに変形してしまっているわけでございます。

さて、そのかくれキリシタンの方々のオラシヨの結びのところに、歌オラシヨ、つまり、メロディーをつけて歌えるオラシヨがございます、今からその歌オラシヨの一曲をお聞きいただきます。

(演奏)

オラシヨ一座（全体を一座と申しますが）のおしまいのところに歌われる歌オラシヨのひとつでございます、今、聞いていただきましたのが、「うぐるりよぎ」という歌オラシヨでございます、ラテン語では、「オ・グロリオザ・ドーミナ」（栄光あふれる女主人よ）つまり、聖マリアをたたえた賛歌でございます、他にも「らおらて」とは、

ウルガタ訳ラテン語の詩篇第一一六篇。それから「なじよう」とは、例のシメオンの賛歌が歌われるわけでありませぬ、只今の「オ・グロリオザ、ドミナ」という聖歌、これも、今日の聖歌集にはないものです。今日ヨーロッパでは歌われていない聖歌です。これも、さきほどと同様に、スペイン、ポルトガル、イタリアの図書館をシラミつぶしに捜しまして、やはり七年かかったわけでございますが、前の曲と同様に、イタリアのタイプのメロディーと、スペイン・タイプのメロディーと二種あることがわかりました。かくれキリシタンの歌っていらっしゃるメロディーは、人によって、集落によってかなり違います、今日は時間がございませんのでいろいろのタイプを比較してお聞き頂けません、集落ごとに違う。ところが全然違うものを何曲も五線譜にしまして、上下に並べて比較してゆくわけです。そうしますと、人によっては歌い方に違いはあっても、上がる方向、下がる方向は、だいたい一致するのですね。その動き方は個人差や、集落によって違いますが、メロディーのベクトルとでも申しましょるか、方向性はだいたい共通しております。そしてそのメロディーの方向性にならう、「オ、グロリオザ、ドミナ」を捜してまいりますと、これも、イタリアの図書館にあるイタリア・タイプのメロディーには全く合わない、ところが私が七年かかってようやく見つけたスペインの図書館にあった、一六世紀に出版されたスペイン・タイプのローカル聖歌とは合うのです。今から私がスペインで見つけました、オリジナルのメロディーを聞いていただきます。

(演奏)

これが一六世紀、スペインの南の地域、とくに、サラマンカとか、グラナダなどで歌われていたローカル聖歌、スペイン特有の聖歌でございます、このメロディーが今から四百年前、スペイン、ポルトガル系の宣教師によって、日本にもたらされ、かくれキリシタンたちの先祖に教えられた。そして、本国ではもうすでにすたれてしまった、全く歌われていない聖歌が、なんと四百年たった今日でも、形をかえて、九州のはじの離れ小島の、かくれキリシタンに

よって、歌いつがれている。しかし、四百年の間にそれは、擦り切れ、擦り切れて、今聞いていただきました流麗なメロディーはどこかに飛んでしまっている。その擦り切れ、擦り切れたところを、もう一度お聞き下さい。

(演奏)

まるで、御詠歌か、何かヨイトマケの音楽みたいになっておりますけれども、このメロディーのベクトルは、一六世紀のスペインの聖歌のものを残している。それに、オリジナルのメロディーでおわかりいただけただけ通りに、一節から三節まで。違う言葉が同じメロディーで三回くりかえして歌ってましたね。こういうものを有節歌曲と申します。われわれがふつう歌う歌というものは、一番、二番、三番と言葉は違っても同じメロディーを繰り返す形をとります。この有節歌曲の形が、オラシヨにもちゃんと保存されているわけでございます。この事実を発見して、私は深い感動を覚えました。音楽というのは非常に弱いものがございます。音楽を聞いたからといって何の腹の足しにもならないし、金もうけにもならない。しかし、その弱い音楽が、四百年の間、あの極限状況にあった、かくれキリシタンが生きたことのひとつの大切な糧として、いまだに生きつづけていた。しかも、それは、今日もう本国では歌われなくなってしまう、一六世紀の古いスペインのローカル・メロディーであります。それが、今なおこの九州の離れ小島で歌われ続けている。生命をかけて歌われつづけている。この事実の前に、私は改めて、信仰というもの、さらにまた音楽の強さというものを、思い知らされたわけでございます。

これ以上、何の補足も必要と思いませんので、そろそろ話をおしまいにさせていただきますが、最後にひとつ、是非ともお聞きいただきたいメロディーがございます。それはこの生月のかくれキリシタンの方々が、オラシヨ一座が終わりまして、お開きにする時に歌う、「サン・ジュアン様の歌」という歌でございます。日本語でございますので充分おわかりいただけると思えますが、この歌詞が大変また感動的な歌詞なのでございますので、ご紹介致します。

まず一番。

「ああ前はな、前は泉水やな

後ろは高き岩なるやな

前もな後ろも潮であかするやな」

これが一番でございます。

これは中江の島という、生月島と平戸島との中間による無人の岩島を歌っております。この島でサン・ジュアン様と呼ばれる殉教者をはじめ多くのキリシタンたちが処刑されました。今でも生月のかくれキリシタンたちはこの島が天国に一番近い島と信じ、その岩からしたり落ちる水を聖水として、洗礼その他に使用しております。前にしたり落ちる水、そして高い岩壁と、この島の情景を歌っているのです。

二番は、「ああこの春はな、桜の花かやちる。ちるやな、

また来る春はな、つぼみ開くる花であるぞやな」

おわかりいただけたと思います。今年の春はもう桜がみんな散ってしまつた、前の家のご隠居もキリシタンの科でつかまつて、殺されてしまつた。サン・ジュアン様も虐殺されてしまつた。人びとが桜の花のように散ってしまう春である。しかし、また来る春はつぼみ開くる希望の花である。かくれキリシタンたちの切なる願いがこめられているわけです。

「ああ参ろうやな、参ろうやな

パライソの寺にぞ参ろうやな

パライソの寺と申するやな、広いな寺とは申するやな

広いな狭いな我が胸にあるぞやな」

これは泣かせます。さあ一緒にパライソの寺、天国に参りましょう。パラダイスというのは遠い、そして広い所だと言います。しかし遠いとか近いとか、広いとか狭いというのは、我が胸にあるのだ。自分の心の問題なのだ。信仰というものの在り方を見事にズバリと怖いまでに言い切った歌のように、私には思われます。

四番、

「ああしばたやま、しばたやまな

今はな涙の谷なるやな

先はな助かる道であるぞやな」

しばたやまというのは生月島の南の断崖にある殉教の聖地でございます、キリシタンの男が、女房と子供を連れてこの断崖の下に隠れておりました。ダン竹という腰の低い竹がありますので、安全と思つて身をひそめていたのでございましょう。ところが子供が泣いていたか、あるいは遊んでいたのでしょうか。それを舟に乗っていた役人に見とがめられました。役人はすぐに舟から降りて磯に登つて、親子三人を切り殺しました。その三人の霊を祀つたのがしばたやまのダンヂク様でございます。従つて、今日でもかくれキリシタンの聖地でございますが、かくれキリシタンの方々は絶対に舟で行く楽な方法をとられません。それは役人がやった事でありますから、どんなにつらくても山の方から約三百メートルもあるような絶崖を降りてお参りいたします、私もちょうど雨が降り出した時にここにまいりました。狭い道で何度もころんで着物を泥だらけにしてこの聖地にまいりました。

「しばたやま、しばたやま

今はな涙の谷なるやな」

この涙の谷というのは、ご承知と思いますが、マリヤ賛歌「サルヴェ・レジナ」の中の言葉でございます。それにひっかけているわけです。

「涙の谷なるやな

先はな助かる道であるぞやな」

それでは、この四節の歌を聞いていただきとうございます。

(演奏)

これ以上の言葉は不要かと存じます。まとまらない話を、ご静聴いただきましたことを、ありがたく御礼申し上げます。(拍手)